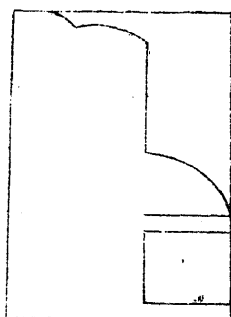
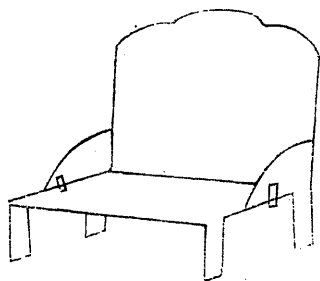


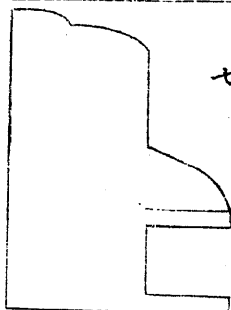
八



六



九



七

それをたてに二つに折つて切るので、切り方は六圖でわかりましょー！

切れましたら、八圖の點線の通りに、折り目を付けて、イとロとの所へ、切れ目を入れて、切り屑の紙を細く切つて、それをさしてとめるのです。

出来上りましたら、剪刀のむねで、よりかゝりの所を、少し後にそらせると、よい形になります。

戸外の遊び

蜻蛉とり。(ほんとに取れる)

夏の遊として、お子たちに最歡迎せられるものゝ一は、確に蜻蛉とりでしょー。

蜻蛉とりの方法で、一番普通に行はれて居るの
はまづ (一) 雌の蜻蛉を糸で、くゝつて夫を、棒

の先に繫いで、日中畑の邊へ出て、其邊を飛び廻つて雄を釣るので、これはどこでもやつて居る様である。但し、この方法では、無論雄の蜻蛉より他は取れない。二は、長い竹の尖つたのに、トリモチをつけて、夕方澤山の蜻蛉が、飛びあつて居るのを滅多無性に粘着けるので、これも所に依ると行はれて居ないでもない。

そこで、翁が今お話ししようと申すのは、前の二法よりは至極簡便で、中々面白くつて、併も頗る運動になる方法なのである。

簡單なと申せば、道具といつて、たいお母さんや姉さんの髪の毛の一寸四五寸許りなのを一本抜いて戴いて、夫から小豆粒大の小石二つを拾つて一づゝ小さな紙片に包んで、さて夫を、髪の毛の兩端に確固と結び付ける、それで道具が出来るので

す。

却説、今頃になりますと、夕方からして、澤山な蜻蛉が出て来て、蚊を食べに来る。所に依りますと、殆ど一面が、蜻蛉で以て覆はれる様なことがある。そこで以て、例の髪の毛を用意して行つて、恰ど一匹の蜻蛉が飛んで来る程を計つて、それを上に抛げ上げる、すると蜻蛉は、確に夫を蚊か蝶かと思つていきなり食べに来る、咬へたと思ふと忽、髪の毛がもつれにもつれて、蜻蛉の身體に纏はつて、十重二十重にからみつく。翼ともいはず、足ともいはず巻き付いて仕舞うので、蜻蛉はアナヤと許り、空から落つこちるのである。

甘く行くと、これで以て一晩に二三匹から十匹以上も取れる。が、時に依ると、小石があまり軽すぎると、或いは又、からみ具合が、よくい

かなかつたために、かゝるわかゝつても、蜻蛉先生悠々として、小石を兩方にブラサゲて、虚空遙に飛びさることがある。

小石の代りに、大豆を二づ、水をつけて磨り合せて、クツつけて、暫燥して固くなつた所で、

そのまんなかを、髮毛で以てくゝつても宜しい。

併、時々持て行かれる恐があると、また、抛げ上る際に、紛失する憂があるからして、道具は是非とも二つ以上も造つておかねばならぬ。

この遊びは、紀州の或地方で、夏の夕暮、盛に行はれる。他では一寸見つけないが、中々興味があつて面白い、子供は勿論大人にても。やつてご覧なさい。確に取れることは受合ひ。



恵の滴

やまとの翁

プロシヤのフリードリッヒ二世と申し奉つるは、西暦千七百四十年から、凡五十年間も、王位に居られました。が、通例フリードリッヒ大王と呼ばれましてプロシヤ唯一の明君だつたと申すこととございませう。

此大王に付いては、面白い話かまことに澤山ありませうが、次の話が其一であります。

或日のことでした。王は、玉座に在して鳴音高く呼鈴を引かれました。が、どーしたものでしたか、誰もお座近く伺うものがない。そこで王は、ご自身お立ち遊ばして、次の間へ出てご覧遊ばされました所が、給仕がたつた一人椅子によりかゝつて居眠をして居ます。王はすぐ呼び醒さうかと覺